

自閉症のある児童へのピアノ演奏スキル向上のための指導

○宮野雄太

（横浜国立大学教育学部附属特別支援学校）

KEY WORDS: 自閉症 ピアノ演奏 WISC-IV

（目的）

興味・関心が限局的な自閉症のある者の、余暇活動のレパートリーが拡大すれば、生活の質が向上し、問題行動が予防される。さらに、生活の質の向上においては、ただ活動レパートリーが拡大するだけでなく、その活動が上達する機会を得られるよう支援することも重要である。真名瀬（2019）は、「9 マス将棋の遊びスキル向上の指導」を報告し、ゲームへの参加ではなくゲームに勝つための指導を行っている。

本研究では、ピアノの演奏に興味をもった自閉症と知的障害のある児童に対して、ピアノ演奏スキル向上のための指導を行った。対象児は、音階がカタカナで示された楽譜と、音階がカタカナで示されたキーボードの鍵盤を照らし合わせて、右手の人差し指だけを使って童謡を弾くことができた。そこで、右手の5本指を使ってピアノを演奏する指導を行い、指導方法について対象児の特性との関係で検討することを目的として研究を実施した。

（方法）

1. 対象児

小学部3年生男子児童A。知的障害と自閉症をもっていた。WISC-IVの結果、知覚推理と処理速度が高かった。

2. 指導期間・場所

X年10月～X+1年3月、特別支援学校

3. 指導方法

練習課題として、「新訂メトードローズ ピアノ教則本（ピアノの1年生）」の楽譜から、5本指の練習に関する2種類の楽譜を選んだ。全ての音符に、指番号を数字で、音階をカタカナで追記して用いた。

指導は、まず教員の右手の5本指に指番号シールを貼り、モデルを示した。その後、児童の右手に指番号シールを貼り、リハーサルを実施した（Day1・2）。その後、指シールを撤去して練習を行った（Day3）。さらに、指番号カードを机に置き、楽譜を弾く練習を行った（Day4～8）。なお、Day3以降はモデルを示さなかった。

4. 研究デザイン

事前事後比較デザインを用いた。

5. データ収集法

評価テストとして、練習に用いる楽譜とは別の楽譜2種類を用いた。この楽譜も「新訂メトードローズ ピアノ教則本（ピアノの1年生）」から選んだ。評価テストで用いる楽譜は、練習で用いる楽譜と難易度が同じものにした。事前・事後テストの記録は、ピアノを演奏している右手の動きをビデオに収めた。ビデオ記録をもとに、正反応であるかどうか評定した。正反応は、楽譜に示された指番号と、実際に鍵盤を押した指番号が一致している場合とした。1回のテストにつき、1つの楽譜を3回弾いた。

6. 倫理的配慮事項

対象児の保護者に書面で承諾を得た。また、発表にあたって筆者の所属長の承諾を得た。

（結果）

1. 練習経過

指導前、Aはピアノ絵本に興味をもち、「ぶんぶんぶん」「おおきなくりのきのしたで」などの童謡のメロディを、

右手の人差し指だけを使って弾くことができた。Aの使っていたピアノ絵本の楽譜は、カタカナと色を使って音階が示されており、付属の鍵盤も対応するようにカタカナと色を使って音階が示されていた。

事前テスト後、初回の指導を行った（Day1）。まず、5本の指を使ってピアノを弾くことと、楽譜に示された指番号の通りに弾くことを説明するため、筆者の指に指番号シールを貼って、楽譜と照らし合わせながら手本を示した。その後、Aも指番号シールを右手に貼り、楽譜の指番号と照らし合わせながら鍵盤を弾いた。初日は、指番号シールと楽譜を照らし合わせることに時間がかかっていたが、正しい指を使うことができた。Day2では、初日より楽譜と指番号シールの照らし合わせが早くなっていた。Day3では指番号シールを貼らずに練習を行い、Aの学習状況を確認した。すると、指番号を確認しながら5本の指を使って弾くことができた。ただし、時折楽譜が指定する指番号とは異なる指を使って弾くことがあった。そこで、Day4～8では、手立てを指番号シールから、机に置く指番号カードに変更し、位置プロンプト（今本, 2021）を抑えて練習を行った。

2. 事前事後テストの結果

指導前後のテストの正反応率を示した。正反応率は、「正反応数/音符の数」で算出した。楽譜1の指導前は29%、指導後は97%であった。楽譜2の指導前は21%、指導後は91%であった。

（考察）

本研究では、自閉症のある児童のピアノ演奏スキルの上達を目指して指導を行い、人差し指弾きから5本指を使った演奏に上達させることができた。指導にあたって、指番号シール、指番号カードという視覚支援、モデルの提示といった支援を行った。Aが5本指で弾くことができたようになったことは、各支援に効果があったことを示唆している。

楽譜に示された指番号と、手元にある指番号シールや指番号カードと照らし合わせるには、視覚的情報を素早く的確に把握する能力が必要である。Aは、WISC-IVの結果、視覚的情報を素早く的確に把握することが相対的に得意であることが示されていた。このように、支援と対象の特性が合致していたことが、本実践が効果的であった要因である。一般的に、自閉症のある人には視覚支援が効果的であるとされるが、その人にどのような視覚的情報が効果的かは、アセスメントに基づく判断が必要である。

（文献）

ERNEST VAN DEVELDE(1947) METHODE ROSE（安川加寿子（訳）メトードローズピアノ教本（ピアノの1年生）、音楽之友社。）

今本繁（2021）応用行動分析に基づく ASD（自閉スペクトラム症）の人のコミュニケーション支援 当事者の不安を解消する「7つの道具」とアセスメント. 中央法規.
真名瀬陽平（2019）自閉スペクトラム症と知的発達症のある男性に対する9マス将棋における遊びスキルの向上を目指した指導. 障害科学研究, 43, 173-181.

（MIYANO Yuta）